

【書評】

キム・チュイ著

『小川』（山出裕子訳）、彩流社、2012年

Kim Thúy,

Ru, Montréal, Libre Expression, 2009.

真田桂子

SANADA Keiko

本書の原題となっている *ru* は、フランス語で「小川」を意味し、比喩的に「(涙、血、金銭などの) 流れ」を指し、ベトナム語では「子守唄」「揺籠」を意味するという。作者のキム・チュイは、1970年代にポートピープルとしてケベックに移住したベトナム系の作家で、本書はその第一作にあたる自伝的な小説である。

「花火で飾られ光の花で彩られた空を、ロケット弾や銃弾が横切る」なかで生まれたという主人公の述懐で始まる物語は、重く切実なベトナムの歴史を背負っている。1960年に勃発したベトナム戦争は、米ソの対立を背景に、共産主義陣営であるホー・チ・ミン率いるベトナム民主共和国（北ベトナム）とアメリカの支援を受けた資本主義陣営のベトナム共和国（南ベトナム）との泥沼の戦いに発展していった。このベトナム戦争の最中、サイゴン（現在のホーチミン市）の裕福な家庭に生まれたチュイとその家族は、北ベトナムの脅威にさらされ、サイゴンが陥落しベトナムが社会主義体制に移行したため、チュイが10歳になった頃ポートピープルとして国外に亡命する。チュイが乗ったボートが向かったのは、その多くが向かうアジア諸国の1つ、マレーシアの難民キャンプであった。それはまさに命がけの脱出であった。「赤十字はベトナムの隣国に難民キャンプを作った。そこまで辿り着けなかった人たちは、逃げていく間に海に落ち、「ポートピープル」にすらなれず、名もなく死んでいった。私は硬い土の上にじかに横たわることができたのだ。[…] 難民の1人になれたという神の祝福を受けた身なのだ。」しかし、こうして辿り着いたマレーシア難民キャンプの生活は、200人しか収容できない

ところに 2000 人も難民がひしめく不衛生で悲惨極まりないものであり、その後何か月かを経てチュイとその家族はケベックに難民として受け入れられ、ようやく安住の地を得ることになる。

本書は、このような幼い頃の過酷な体験と変遷を経て、作者がケベックに移住して 30 年余りを経てから書かれている。チュイはケベックで大学を卒業後、縫い子や事務員、翻訳者、弁護士となり、レストラン経営も行うなど実に多彩な経歴を経ており、その後ふとしたきっかけで執筆された作品であるという。この小説を読むものは、もちろん作者の稀有で過酷な体験の数々に胸を打たれることだろう。しかしこの作品の魅力は、成人し、たとえ数十年を経たのちにも、歴史に翻弄され、痛痒をもってしか思い起こすことの出来ない故郷の情景や人々の生活、とりわけ大家族をなすベトナムの一族の姿、戦火の中で名もなく消えていった人々など、幼い頃に体験し見聞きした出来事の数々が、作者の深奥に刻み付けられ、決して消えることなく、鮮やかに浮かび上がってくることにあるだろう。それらは、むしろ追憶のなかで研ぎ澄まされ浄化され、悲惨すら詩（ポエジー）に転嫁する、繊細でしなやかな文体によって甦るのである。難民である一家を温かく迎えてくれた、モントリオール郊外の町、グランビーでの生活はあたかも「地上の楽園」のようだった。そこで耳にした虫の鳴き声は、マレーシアのキャンプの例えもなく劣悪な便所小屋で聞いていた虫たちの歌と重なり合う。ケベックでの平穏な日常に、白昼夢のようなベトナムやマレーシアでの情景や、人々の姿が浮かび上がり炸裂する。この小説の文体は、記憶の断片がコラージュのようにつながり合わされ、ほとんどが 1 ページに収められた短い章の数々で組み立てられている。しかし、そこに描かれる世界は 1 つ 1 つが固有のもので、凝集され濃密で、熟れた果実をほおばったときのように、独特の芳香と余韻を残す。それは、まさに幼い頃から様々な人生の浮沈を経験して会得した、この作家独自の世界の切り取り方や感受性が醸し出す技に他ならないであろう。劣悪な環境と不条理のなかで、数奇な運命をたどり命を落とした名もなき人々の姿が、静かな怒りをもって描かれる。「ある女性はドジョウでいっぱい池の上に設置されたトイレに足を取られて亡くなった。プラスチックのサンダルが滑ったのだ。[...] 彼女は悪臭のする穴の中で死んだ。彼女は 2 枚のベニヤ板の間の、[...] 鱗のない、ツルツルとした肌をした、鮮やかな黄色をしたドジョウに囲まれて、記憶に残ることなく死んでいった。」一方、一族の 1 人で、ベトナムでは裁判官までつとめたアンおじさんは、共産

主義者に捕えられ過酷な再教育のためのキャンプ場で、拳銃をこめかみに当てられ、迫りくる恐怖のなかで見上げた空に、はじめて美しいグラデーションがあることに気付く。「彼は生き残った。[...] 他の仲間たちは、空のグラデーションを数えることなく、窒息死したり、飢え死にしたりしていた。その後の彼は、仲間たちのために、毎日、空の色の数を報告することを日課としていた。」こうして極限の状態のなかで、精神の均衡すら失いながらも、澄んだ哀しみとともに生き延びる人々の姿も浮き彫りにされている。

祖国への溢れる思いが表される一方で、主人公は旅先で、ふとケベックで流通している柔軟剤の匂いを嗅いで強い愛着を覚える。こうしてチュイは、自らのうちに受け入れの地で生まれたもう 1 人の自分の存在を強く意識する。訳者も言及しているように、近年ケベックにおいて広がっている間文化主義の影響がチュイの作品に表れているとも考えられるだろう。しかし何より、チュイの作品は、1980 年代にケベックにおいて発祥した *l'écriture migrante* (移動文学) の流れを汲むものとも言えるだろう。グローバル化のなかで移民によってもたらされる文学表現の意義とその独特の美学をいち早く評価して命名されたこの文学は、いまケベックのみならず、フランスを始め様々な地域で人口に膾炙しまさに 1 つのジャンルを形成しているかのようである。チュイに先立ってケベックで注目されたアジア系の作家である、イン・チェンやアキ・シマザキが決然と祖国を去って、成人してカナダに移民したのとは異なり、チュイの場合、幼い頃に両親に連れられて祖国を離れている。祖国への思いはそれゆえ、いっそう入り組んだ複雑なものであるかもしれない。

しかしいずれにせよ、「あなたの唇に私の言葉が滑り込むその瞬間まで、私やその前を生きた人々の痕跡を記す、[...] 白昼夢のような彼らの痕跡を」という作者の声を聞くととき、世界の 17 か国もの国々で翻訳されたというこの作品の真価は、そうした文学的潮流のなかにあるのではなく、何より、運命に翻弄され苦しみ、消えていった名もなき人々への深い共感に裏打ちされた、表現者としての強い使命感と矜持のなかにこそあるように思われる。そしてその声が、訳者と出版社の尽力によって日本語として届けられたことを嬉しく思う。

(さなだ けいこ 阪南大学教授)